

八木健に学ぶ滑稽俳句 17

高橋 素子

啓蟄に引く虫偏の字のゐるはゐるは 上田五千石

人は蛇を怖がるか、蜘蛛を怖がるかどうかであるという。すなわち脚のないものとあるもの、どちらが苦手かということらしい。「虫は、まむしの象形。頭が大きくてグロテスクな形にかたどり、まむしの意味を表す。さらに、一般に爬虫類の意味も表す」と、辞書にはある。成る程、虫偏の生き物は、爬虫類を元祖に、両生類から昆虫その他いろいろ一大勢力をなす。ちょっと考えただけでも、蛇・蜥蜴・蛙・蛞蝓・蚯蚓・蜘蛛・蜻蛉・蝶・蟬・蟻・蚊・・・ときりがないが、蚊と言えば、このところの地球温暖化で、「デング熱」を媒介するヒトスジシマ蚊の生息域が東北地方まで北上・・・8月末の代々木公園周辺での感染者からの広がり、9月8日の時点では、14都府県80人に拡大、南方の感染症の流行が恐れられている。

今回は虫偏の生き物で古今の名句と師匠の句の比較により、滑稽句の学習を深めて行きたい。

血を分けし身とは思はず蚊の憎き 内藤丈草

蚊の声す忍冬の花の散るたびに 与謝蕪村

大男コガタアカイエカに悩む 八木健

掲出の句のように、蕉門十哲の一人・丈草の作風は高雅洒脱である。我

が血を吸った蚊は、自分の分身とは到底思えず憎たらしいとの意であるが、身の周りを飛び回る蚊にどこか親しみと愛嬌をも感じさせる句となっている。勿論、交通網が発達して熱帯の感染症を運ぶ現代においては、蚊に親しみなど感じてはいられません・・

忍冬は「すいかずら」のことですが、俳人として著名な蕪村は画家でもありました。師・八木健は掲出の句について、次の様に説明しています。「忍冬の花の蕊は長く垂れていて、花びらは羽のようにも見えます。花を描いていた蕪村は、花が散る瞬間を見て、あっ！と声をあげました。花はふうわりと、まるで遊泳をするかのようです。蚊に酷似している。蚊が脚を垂らして舞う姿そっくりです。夢中で描き続けている蕪村の耳に、花が散るたびに蚊の声が聞こえてくるのでした。これが、『蚊の声がした秘密』です」と。続けて『知る喜び』、俳句は精神史です。このように、俳句は見えるものだけでなく、自分の脳裏に浮かんだことを描写すればよいのです」と、教授された。

掲出の師匠の句は、小さな力士が巨漢の力士を投げ飛ばす相撲のさまにも、私たちは興奮して快感を覚えるが、もっともっと大小の差がある、ほんの小さな蚊に悩まされている滅法強い大男の話である。その場の様子を想像するだけで思わず笑えてくる。上手い滑稽句である。

蟾蜍長子家去る由もなし

中村草田男

蟾蜍字も難しき面構へ

八木健

草田男の句は、長子としての自分の立場を鈍重で不敵さも感じさせる蟾

蝾に象徴させている。長子だから家を去れないと、泣き言を言っているのではなく、長子の宿命的重みをしっかり受け止めて生きてゆくとの決意を詠んでいる。

師・八木健の句は、動作が非常にのろく陰鬱でグロテスクな蟾蝈は、その字面の構成や字面から受ける印象さえも難しいと、文字からの発見を面白く詠んで滑稽句の佳句となっている。

薬師寺の尻切れとかげ水飲むよ 西東三鬼

恐竜の子孫の蜥蜴岩を這ふ 八木健

残像を岩に置きけり青蜥蜴 八木健

「俳句の魔術師」と言われ、斬新で奇抜で知的な作風が特色の三鬼が、第二次世界大戦後作風を転換、掲出の如く「写生」を主とする句を詠んでいる。

「尻尾切り」で知られる蜥蜴の句である。敵におそわれて尾を押さえられると、尾を切って逃げ、切られた尻尾は健気に動き周り、敵の目を引き付けるといふ。だが、蜥蜴の尻尾はしばらくすると再生する。

三鬼の掲出の句は、新しく尻尾が生える前の蜥蜴を写生して詠んだ句であるが、お寺で見つけた尻尾の切れた水を飲む蜥蜴である。その雰囲気を作り出す不気味さや重苦しさは、単なる写生の句ではなく、三鬼自身の精神そのものを暗示し、象徴しているかの様に思えて来る。

蜥蜴は原始の姿をおもわせるような体をしていて、どことなく不気味だが、よく見れば、何と無くかわいい感じのする小動物である。「『蜥蜴は恐竜の子孫だ』と、一瞬誰もが思うのですが、『蜥蜴は爬虫類』という知識があり、誰もそんなことは口にしません。この『知識・常識』というのが、作句の上では邪魔なのです。掲出の句は、恐竜がこのような形で生き延びてくれたことに感動して得られた一句です」と、師匠は笑った。

蜥蜴の伶俐そうな目や咽の動きなどは、動きのすばやさと共に印象的である。岩の上にいた青蜥蜴が素早く姿を消した。その一瞬の岩に置かれた残像のインパクトを師匠は滑稽句に詠んでいる。